

学生生活と学業成績の関連性についての包括的調査 — 悉皆調査による学生指導資料作成に向けた実験的取り組み —

上 崎 哉
(近畿大学法学部)

Relations between Living Conditions of Students and School Achievement

Hajime Uesaki
(Faculty of Law, Kinki University)

Summary

This article deals with a complete survey of student life among students belonging to the faculty of law of a private university. Originally we carried out this survey to understand more deeply the students' wishes for the class, by learning more about the students' lives. But this survey has three additional purposes.

1. To clarify the ability of the faculty to provide to the staff the information needed to instruct the students. By clarifying the students' impressions of the faculty, and their attitudes to studies and extracurricular activities, we would gain more accurate images of the students.

2. To implement organized improvement of the faculty by knowing the students' evaluation of the faculty as soon as possible.

3. To clarify the factors that raise the abilities of students or discourage them, so that we can construct materials for students' self-reflection. To accomplish this purpose, we integrated the data about student life and the data about school achievement.

キーワード：学生生活実態調査、学業成績との関連性、学生指導、自己省察

Keywords: Student life, School Achievement, Student Instruction, Self-reflection

1. はじめに

我が国の大学教育で FD 活動の必要性が強く認識されるようになった背景として、進学率の上昇や入試制度の多様化により、様々な学生が入学するようになったことが挙げられる。本調査の対象であり、小職が所属する学部も例外ではなく、ほとんど受験勉強をせずに入学する学生から、いわゆる難関大学にも挑戦してきた学生まで、幅広い層が入学してくる。更に、現在でも受講生が 300 人を超えるクラスを解消するには至っておらず、一人一人のニーズに対応することは難しい状況である。

こうした状況において、本学でも授業評価アンケートが定期的に実施されてきたが、以下のような問題点が認識されていた。第一に、担当者が結果を手にするのが成績評価後であるため、仮に学生から授業改善に繋がる意見が寄せられたとしても、その改善は次の半期に回さざるを得ないという点である。第二に、回答用のマークシートには自由記述欄が設けられているが、重点が尺度評価式にあるため、学生が何に満足して何に不満を抱いているのか、そして授業のどこが改善されるべきかについて、教員が十分な情報を得るのが難しいという点である。

そして、まずはこれらの問題点の改善を図るべく、本学部所属の 4 名の教員の協力を得て¹⁾、毎授業終了後に、Web を利用した自由記述式の授業アンケートを実施することとした。その結果、学生の具体的な要望や感想が教員にリアルタイムで伝えられ、フィードバックまでのタイムラグを短縮することができた²⁾。ただその一方で、しばし

ば学生から相反する意見が寄せられた結果、教員がジレンマに苛まされることも少なくなかった。

そこで、学生の要望によりの確に応答するには、その実態を知る必要があると判断し、共同研究の第二段階として学生の生活実態を調査することとした。更に、単に学生の生活実態を調査するだけでなく、生活実態と学業成績の関連性を分析することとした。本稿は、2年間のこうした調査・分析活動に関する実践報告である。

2. 学生生活実態調査

2.1. 調査方法等

①調査方法

まず、調査方法だが、印刷された質問票（質問項目については後述）を配布し、回答には市販のマークシートを使用している。その際、成績との関連性の調査に必要であることから、氏名と学籍番号を記入するよう指示している。このため、膨大な個人情報扱うこととなるが、質問票に個人情報の扱いに関する文章を記載し、マークシートの読み取りは共同研究者が直接行い、成績も含めたデータについては、共同研究者や事務局局間でUSBメモリを介して直接やり取りするようにしている³⁾。

次に調査対象者だが、他の教員や事務局の協力を得て、悉皆調査として行っている。ただし、一気に4学年全てを対象とするのではなく、2010年度は1年生のみを対象とし、年度を追うごとに対象を広げることとした。最終的には2013年度に、1年生から4年生まで、法学部所属の全学生を対象とする悉皆調査が完成する予定である。

次に悉皆調査の方法だが、回収数の確保に重点を置き、1年生については、前期開講の必修科目である基礎ゼミの授業評価アンケートと同時に実施している⁴⁾。また、2年生については、必修科目である専門演習⁵⁾の申し込みが前期中に行われることから、申し込みと同時にマークシートの提出を求めている。

このように、1年生と2年生については調査方法を確定できているが、3年生と4年生については試行錯誤を続けている状況である。確かに3年生と4年生のゼミは必修であるので、授業評価アンケートと同時に実施する方法も考えられるが、これらはいずれも通年科目であるため前期中に授業評価アンケートは実施されない。もちろん、後期に実施することもできるが、時期が半期ずれることに加えて、特に4年生については卒業直前となってしまうことから、3年生と4年生についても前期中に実施することとした。

そしてその方法は、ゼミの担当教員に配布と回収を依頼するというものである。このため、授業評価アンケートと同時に実施できず、授業時間内に時間を割くこともできないので、回収率は低下するであろうと予測している⁶⁾。また、4年生については2013年度を待つことになるが、前期に実質的に演習を行っていないクラスがあるという問題もある。

②質問項目

質問項目は、Benesse教育研究開発センターの『大学生の学習・生活実態調査』をベースとした⁷⁾。その上で、高校時代の状況には我々がタッチできないことに加え、回答の際の学生の負担を考慮して、高校時代の学習に関する質問項目は削除している。更に、当初採用したシステムが複数マークに非対応だったため、複数回答を認める選択肢を一つ一つばらした上で、表2-1に示される全80項目からなる質問票を作成した。

表 2-1 質問項目の概要

設問番号	質問内容
設問 1～5	基本的属性（性別、所属学科、現役／浪人、入試区分、お住まい）
設問 6～25	本学部の志望理由と受験勉強の状況
設問 26～31	本学部に対する評価
設問 32～39	大学で力を入れたいこと
設問 40～42	他大学等への再入学の意思
設問 43～52	授業の出席状況等の生活実態
設問 53～62	授業に対する要望
設問 63～80	学業に対する取り組み

次に選択肢の設定であるが、Benesse 教育研究開発センターの質問票では「どちらでもない」という選択肢が用意されているのに対し、本調査では、多くの学生がこの選択肢を選択してしまうことを懸念し、原則として4段階に分けて選択肢を設定した。具体的には、「よくある、時々ある、あまりない、全くない」といった具合である。

2.2. 調査結果の概要

まず、これまでの回収状況を示すと、表 2-2 の通りである。

この表に示されるように、2011 年度の 1 年生の回収数が相当に減少しているが、その理由としてクラス単位で回収できていないケースが散見されることが挙げられる。一方、2 年生については先述のように専門演習申し込み時に併せて提出させており、更に、窓口となる事務部局の方で、アンケートが提出されなければ申し込みも受け付けないという対応をとっているため、100%に近い回収率となっている。

表 2-2 過去の回答状況

	1 年生	2 年生	総計
2010 年度	672 人	—	672 人
2011 年度	538 人	693 人	1231 人

ただその一方で、こうした方法で全員に提出を求めた結果として、回答の信ぴょう性が低下している可能性は否定できない。ゼミの申し込みを受け付けてもらいたいがために、やつついで回答がなされていることも十分に考えられるからである。

この問題について有効な対策は見出せていないが、同一人物について基本的属性の回答内容の相違をチェックしてみたところ、1 年次と 2 年次で性別が相違していたものが 2 件、学科が相違していたものが 8 件、現役／浪人の別が相違していたものが 16 件であり、概ね真面目に回答がなされているものと判断している。

3. 実態調査の活用

現時点では、こうして得られた調査結果を、①在学生の実態の把握、②種々の改善活動のための基礎資料そして③学生指導及び自己省察資料としての活用といった用途で使用しようとしている。

3.1. 在学生の実態の把握

大学教員は授業の場だけではなく、様々な場面で学生との接点を有しており、そうした接触を通じて得られた情報を、各自が解釈しながら教育に反映させることが求められている。そして、大学教育が属人的な要素をかなり備えている以上、個々の教員による評価や判断は当然尊重されるべきである。ただその一方で、自らの主観のみに頼るのではなく、一定の客観性を備えたデータも踏まえた上で、教育や学生指導を行うことも必要であろう。

我々は、この調査結果の概要を教員全員が集まる会議で報告しているが、そこにはこうした意義があるものと考えている。

ただし、まだ長期にわたる調査結果が蓄積されていないため、2011 年度の会議では、2011 年度と 2010 年度の 1 年生の回答で有意差（5%水準）の認められた項目（表 3-1）を報告した上で、そこから導き出される 2011 年度の 1 年生の特徴を報告している。

表 3-1 2010 年度と 2011 年度の 1 年生で有意差の認められた質問項目一覧

設問番号	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	年度	N	平均値	有意確率
設問 6	受験する際に、どの程度重視しましたか (入試方式が自分にあっていること) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	538	1.749	<.001
		2010	661	1.944	
設問 8	受験する際に、どの程度重視しましたか (試験日や試験会場が多く、受験しやすいこと) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	537	2.207	0.017
		2010	661	2.356	
設問 13	受験する際に、どの程度重視しましたか (就職状況がよいこと) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	537	2.447	0.043
		2010	661	2.555	
設問 14	受験する際に、どの程度重視しましたか (キャンパスの雰囲気がいよいこと) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	537	2.229	0.018
		2010	661	2.363	
設問 24	受験する際に、どの程度重視しましたか (キャンパスライフが楽しそうなこと) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	537	2.341	0.001
		2010	660	2.529	
設問 26	現在の大学・学部に進学したとき (入学年の 4 月 1 日時点) のお気持ちとして、もっとも近いもの ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	2011	538	2.238	0.008
		2010	662	2.393	
設問 37	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか (社会活動) ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余り力を入れたくない、④全く力を入れたくない	2011	538	2.433	0.049
		2010	660	2.535	
設問 42	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか (他の大学に入り直したい) ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	2011	538	2.730	0.002
		2010	662	2.527	
設問 43	あなたは 1 週間のうち、だいたい何日大学に通っていますか ① 1 日、② 2 日、③ 3 日、④ 4 日、⑤ 5 日、⑥ 6 日、⑦ 7 日、⑧ 0 日 (後に 0 にデータ変換)	2011	538	5.076	<.001
		2010	660	4.876	
設問 45	あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか (文化系サークルや部活動) ①参加している、②以前は参加していたが辞めた、③参加しようと思っているものがある、④参加していない	2011	537	2.888	0.047
		2010	659	3.046	
設問 46	あなたは現在、平均すると 1 週間に何時間課外活動をしていますか ①していない、② 10 時間未満、③ 10～20 時間、④ 20～30 時間、⑤ 30～40 時間、⑥ 40 時間以上	2011	537	2.035	0.05
		2010	661	1.927	
設問 49	あなたは大学の授業以外に 1 週間平均で何時間くらい勉強をしていますか ① 30 時間以上、② 20～30 時間、③ 10～20 時間、④ 1～10 時間、⑤ 1 時間未満、⑥ 全くしていない	2011	536	4.328	0.035
		2010	661	4.461	
設問 60	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい ②：学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい	2011	537	1.568	0.009
		2010	659	1.490	

3.2. 種々の改善活動のための基礎資料

本学部でも、学部全体に対する評価として、卒業時に卒業アンケートを実施している。このアンケートは原則的に卒業証書授与と併せて実施していることから、85%以上の回収率を達成しており、「ほぼ満足」を 7 点とする 10 点満点の尺度式評価において、75%程度の学生が 7 点以上と評価する結果が得られている。

だが、この卒業アンケートにしても、授業評価アンケートと同じく、アンケートに協力した卒業生に改善のメリットが及びにくいという問題点が存在する。そして、この問題点の解決には、在学生の評価や要望を積極的にくみ上げることが必要だが、そのためにも本調査は有用である。というのも、先に表 2-1 に示した通り、6 項目と数はそれほど多くないものの、本学部に対する評価を問う項目を設定しているからである。

更に、記名調査であることから、同一の学生の評価が進級時にどのように変化したかの追跡も可能である。試みに、2010 年度の 1 年生が、2 年生進級時に本学部に対する評価をどのように変化したかを纏めたのが表 3-2 である。

表 3-2 2 年進級時の本学部に対する評価の変化

設問番号	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	年度	N	平均値	有意確率
設問 27	現在通っている大学について、どのくらい満足していますか（施設・設備（図書館やインターネットの利用など）） ①とても満足している、②まあ満足している、③あまり満足していない、④全く満足していない	1 年次	554	1.866	<.001
		2 年次	554	2.101	
設問 28	現在通っている大学について、どのくらい満足していますか（進路支援の体制（就職セミナーやガイダンスなど）） ①とても満足している、②まあ満足している、③あまり満足していない、④全く満足していない	1 年次	554	2.099	0.019
		2 年次	554	2.182	
設問 29	現在通っている大学について、どのくらい満足していますか（教員（専門性の高さやよい影響を受けるなど）） ①とても満足している、②まあ満足している、③あまり満足していない、④全く満足していない	1 年次	554	2.287	0.004
		2 年次	554	2.399	
設問 42	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか（他の大学に入り直したい） ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	1 年次	554	2.531	0.008
		2 年次	554	2.657	

このように、3つの質問項目において評価が下落している一方で、他大学への再入学志向は低下したという結果が得られた。現時点での調査対象は2年生までであり、この後の学生生活を通じて評価が上昇に転じ、最終的には4分の3程度の学生がそれなりに満足をして卒業しているのかもしれない。この点について判断を下すには3年生及び4年生が対象に加わるのを待つよりないが、少なくとも、2年生になって評価が下がっている項目があるという現状は直視する必要があるだろう。

3.3. 学生指導及び自己省察資料としての活用

3 番目の活用方法として模索中なのが、学生指導及び自己省察資料としての活用である。

本学部も例にもれず、中途退学や留年の抑制という課題を抱えており、その対策の一つとして、必修科目における常習欠席者の組織的な把握に努めている。だが、必修科目で欠席が続くというのは症状としては重症であり、その前の段階で手を打つことも必要である。そこで、学生の生活実態と学業成績の関連性を分析することで、学業面で困難に陥りやすい学生の傾向を把握し、将来的にはそれを学生指導のための基礎的資料として活用することも視野に入れている。以下は、この点に関する基礎的分析である。

3.3.1. 本学部のカリキュラムと基幹科目

将来的に GPA 制度が導入され、教員間の成績評価のばらつきが解消されれば、学生の履修状況に関係なく、横断的な成績の比較が出来るかもしれない。だが、本学部では現時点で GPA 制度は導入されていないため、学生の履修状況によるばらつきが無視できない可能性がある。このため、全科目を通した成績比較は難しいが、その代わりとして、相当数の学生が共通して履修する科目の成績を利用することとした。

この点を説明するために、本学部のカリキュラムと、その一つの柱である基幹科目を説明すると以下の通りである。

まず、本学部のカリキュラムは、法学部に入学した以上、法律学及び政治学の基幹をなす科目については、一通り修得した上で卒業すべきであるという基本構想に立っている。このため、本学部には法律学科と政策法学科の2つの学科があるが、両学科共に、1年生については、憲法 A、憲法 B、民法 A、民法 B、行政法入門、刑事法入門、刑法 A、政治学原論 A、政治学原論 B の9科目が、基幹科目として履修必修とされている。

これに対し、2年生配当の基幹科目は、学科の特色を出す必要性から法律学科と政策法学科で多少相違している。加えて、2年生配当の基幹科目は履修必修ではないことから、受講には一定の自由度が存在している。ただその一方で、基幹科目に関しては、1年生配当も含めた全20科目40単位中、16科目32単位以上の修得が卒業に必要であることに加え、本学部のカリキュラムが、他の専門科目よりも基幹科目を先行的に修得することを求める設計になっているため、2年次でも多くの学生が優先的に基幹科目を受講している。

つまり、基幹科目については、ほぼ全ての学生が同じように履修していることから、学生間の成績の比較資料として用いることができると判断している。

3.3.2. 1年次の基幹科目の修得状況と成績下位者の特徴

学生生活実態調査と学生の成績評価とを接合させる分析の第一として、1年次に成績不良に陥る学生の諸特徴を明らかにしてみたい。ただ、そのためには準備作業として、成績面で困難を抱えている、あるいは抱える可能性がある学生を抽出する必要がある。そこで、1年生の基幹科目の修得状況を示す図3-1を踏まえた上で、1年次に基幹科目の修得単位数が4科目8単位以下の学生を下位学生と位置づけることとした。

この基準を設定する上で第一に考慮したのは、4年間で卒業可能なペースにあるかどうかである。先述したように、卒業には16科目32単位の基幹科目の修得が必要であり、この要件を満たすためには、毎年4科目8単位の修得が必要である。だが、このペースが一度でも狂うと4年間では卒業できないことに加え、留年や退学の事前抑制には危険水域にある学生まで対象に含めることが望ましいことから、こうした基準を採用することとした。

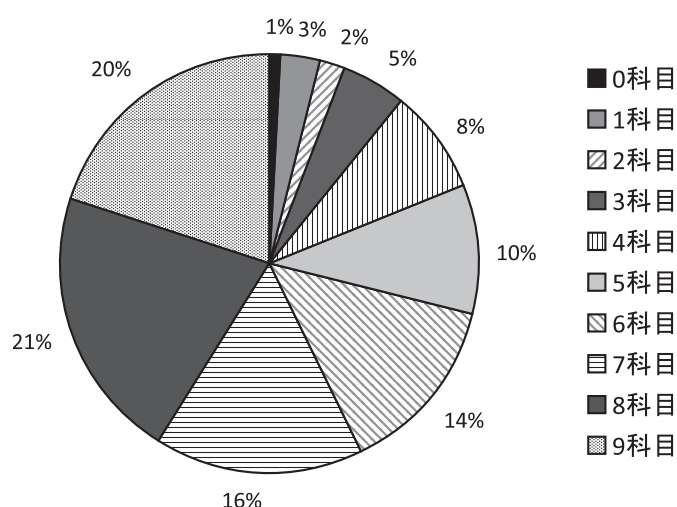


図3-1 基幹科目修得状況

更に、比較を通じて下位学生の特徴をより明確に抽出するために、残りの層を次のように二つに区分することとした。まず、残りの層に属する学生のうち、下位学生とほぼ同じ比率（20%程度）の学生を上位学生、上位学生と下位学生の中に位置する学生を中位学生とした。修得単位数で言えば、基幹科目の全てである9科目18単位を修得している学生が上位学生、5科目10単位以上8科目16単位以下を修得している学生が中位学生となる。

そして、上位学生と下位学生を比較し、その回答に有意差（1%水準）の現れた諸項目を示したのが表3-3であり、下位学生の特徴をより視覚的に表すために、質問項目74の回答状況を示したものが図3-2である。

これらの図表が示すように、学業等に対する取り組み姿勢に問題を抱えている学生が、単位修得状況でも下位に位置するという結果が得られた。

表 3-3 上位と下位とで有意差の現れた質問項目一覧

設問番号	（上段）質問内容、（下段）選択肢	上位／ 下位	N	平均値	有意確率
設問 32	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（大学の授業） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	上位	253	1.466	<.001
		下位	171	1.883	
設問 33	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（サークルや部活動） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	上位	253	1.881	0.005
		下位	171	2.164	
設問 34	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（大学の授業以外の自主的な勉強） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	上位	253	1.822	<.001
		下位	171	2.164	
設問 39	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（読書（マンガ、雑誌を除く）） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	上位	253	1.980	0.005
		下位	171	2.228	
設問 40	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか（同じ大学の他の学部に移りたい） ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	上位	253	2.830	0.007
		下位	171	2.526	
設問 47	あなたは現在、平均すると 1 週間に何時間アルバイトをしていますか ①していない、② 10 時間未満、③ 10～20 時間、④ 20～30 時間、⑤ 30～40 時間、⑥ 40 時間以上	上位	253	1.834	<.001
		下位	171	2.327	
設問 49	あなたは大学の授業以外に 1 週間平均で何時間くらい勉強をしていますか ① 30 時間以上、② 20～30 時間、③ 10～20 時間、④ 1～10 時間、⑤ 1 時間未満、⑥ 全くしていない	上位	253	4.190	<.001
		下位	171	4.632	
設問 50	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか（外国語科目） ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	上位	253	4.862	<.001
		下位	171	4.485	
設問 51	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか（共通教養科目） ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	上位	253	4.771	<.001
		下位	171	4.117	
設問 52	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか（専門科目） ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	上位	253	4.755	<.001
		下位	171	4.053	
設問 61	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい ②：授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい	上位	253	1.206	<.001
		下位	171	1.392	
設問 63	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業の予習をする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.723	0.003
		下位	171	2.977	
設問 64	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	1.403	<.001
		下位	171	1.731	
設問 65	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業に遅刻しないようにする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	252	1.401	<.001
		下位	171	1.883	
設問 66	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	1.937	<.001
		下位	171	2.287	
設問 68	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業中わからなかったことは先生に質問する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.589	0.002
		下位	171	2.865	
設問 69	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業中で出された宿題や課題はきちんとやる） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	1.625	<.001
		下位	170	2.106	
設問 71	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業の復習をする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.399	<.001
		下位	171	2.860	
設問 72	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業でわからなかったことは、自分で調べる） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.332	<.001
		下位	171	2.655	
設問 74	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業で配布された資料などを整理する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	1.862	<.001
		下位	171	2.257	
設問 75	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.292	0.003
		下位	171	2.561	
設問 78	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（計画を立てて勉強する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.423	0.004
		下位	171	2.684	
設問 79	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（自分の意思で継続的に勉強する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	2.237	<.001
		下位	171	2.596	
設問 80	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（できるかぎり良い成績をとろうとする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	上位	253	1.585	<.001
		下位	171	1.965	

こうした学生に対する対応策は後に改めて議論したいが、これが1年生に対する調査結果であることを鑑みれば、このような学業に対する姿勢や態度が、既に大学入学前から形成されていた可能性も十分に考えられる。我々の調査では、高校時代の学習状況等に関する質問項目は省いてしまったが、原因を探る上でこれらの質問項目が有益である可能性は十分にある。今後の調査では、項目を復活させる予定である。

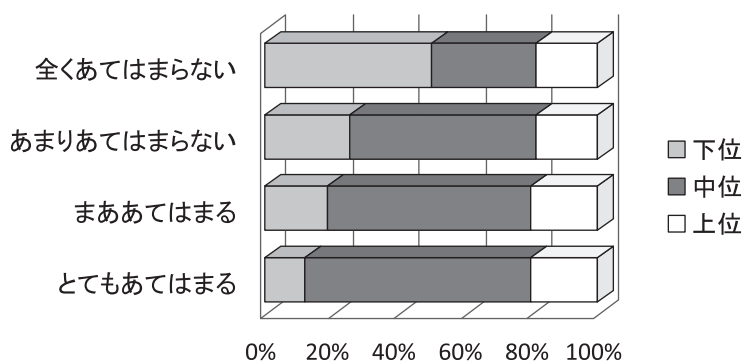


図 3-2 上位、中位、下位学生別の資料等の整理状況

また、逆に有意差の認められなかった諸項目であるが、特に驚くような結果は現れていない。ただ、あえて挙げるとすれば、まずは設問 40～42 となろう。これらは他大学等への再入学等の意思を問うものであるが、他学部に対してのみ有意差が見出され、他学科と他大学について有意差は認められない。この結果を解釈するに、本学への入学については下位学生もそれなりに満足しているものの、学部選びでミスマッチを感じている者が相当数存在するということであろう。

次に、学業に対する取り組みに関する質問項目の中で、5%水準でも有意差が見られなかった項目として、設問 70（クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする）と設問 77（大学以外の学校などに通って勉強する）を挙げることができる。

両者のうち設問 77 については、まだ1年生であり学外の学校に通う事例自体が少ないからだと理解できる。一方、設問 70 であるが、授業中に積極的に発言するからといって学業成績が良いとも限らず、逆に学業成績が良いからといって授業中に積極的に発言するとも限らないという実情を表すものであり⁸⁾、小職の実感に反するものではない。

3.3.3. 2 年生進級時の成績状況の変化

本調査は記名式であり、学生の成績状況の変化を追跡できることから、どのような学生が2年生進級時に成績を上昇させ、あるいは下落させているかの把握も可能である。

そこで、まず変化を把握するために、2年生についても1年生と同じく3つに区分することとした。そのための基準として、まず下位については1年生と同じく4年間での卒業を重視し、4科目8単位以下の修得で線を引いた。一方、上位と中位については、上位、中位そして下位の比率を1年次と出来るだけ揃えることが望ましいと判断し、8科目16単位以上修得を上位、5科目10単位以上7科目14単位以下修得を中位と区分した。

その上で、1年次と2年次の状況を表に纏めたものが、表 3-4 である。

表 3-4 1 年次と 2 年次の成績状況

2 年次 1 年次	上位	中位	下位	合計
上位	65 36.3%	85 47.5%	29 16.2%	179 100.0%
中位	93 23.5%	180 45.6%	122 30.9%	395 100.0%
下位	8 6.7%	29 24.4%	82 68.9%	119 100.0%
合計	166 24.0%	294 42.4%	233 33.6%	693 100.0%

下段は 1 年次の階層ごとの比率

① 1 年次に上位であった学生の変化

まず、1 年次に上位であった学生について、上位を維持した学生と下位に転落した学生を比較し、どのような学生が下位に転落する傾向にあるかを分析してみたい。そこで、両者の間で回答に有意差を生じた諸項目を纏めてみると、表 3-5 のようになる。そしてこの表から、上位から下位に転落した学生像を解釈するならば、次のようになろう。

まず、高い目的意識を抱いて入学したというよりも、キャンパスの雰囲気にあこがれて入学したという傾向が強く、1 年次にはそれなりの成績は修めているものの、日常的な学業に対する取り組みという点で、模範的とはいえない。

2 年生に進級後は、資格試験等に向けた勉強に打ち込むわけでもなく、学業に対する意欲を一層低下させ、とりわけ専門科目への出席状況を悪化させている。これらの点に、1 年次には上位であったこと、並びに設問 58 と設問 59 に対する回答を加味して解釈すれば、それなりの能力は持っているが、本学部のカリキュラムに沿って能力を伸ばせていない学生像が浮かび上がってくる。加えて、そうした学生が法律学科に多い点については、更なる調査分析を行った上で、組織的な対策を講じる必要があろう。

表 3-5 上位維持学生と下位転落学生とで有意差 (5%水準) を示した諸項目

設問番号	年次	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	上位/ 下位	N	平均値	有意確率
設問 2	—	あなたの所属している学科 ①法律、②政策法	→上位	56	1.536	0.021
			→下位	23	1.261	
設問 14	1 年次	受験する際に、以下の各項目についてどの程度重視しましたか (キャンパスの雰囲気がいよいこと) ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	→上位	56	2.696	0.013
			→下位	23	2.087	
設問 64	1 年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	56	1.232	0.027
			→下位	23	1.609	
設問 30	2 年次	現在通っている大学について、どのくらい満足していますか (授業・教育システム (教育内容やカリキュラム)) ①とても満足している、②まあ満足している、③あまり満足していない、④全く満足していない	→上位	56	2.393	0.026
			→下位	23	2.130	
設問 31	2 年次	現在通っている大学について、どのくらい満足していますか (大学全般を総合的に判断して) ①とても満足している、②まあ満足している、③あまり満足していない、④全く満足していない	→上位	56	2.304	0.038
			→下位	23	2.000	
設問 33	2 年次	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか (サークルや部活動) ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余り力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	56	2.161	0.025
			→下位	23	1.609	
設問 52	2 年次	授業に平均してどの程度出席していますか (専門科目) ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	→上位	56	4.911	0.032
			→下位	23	4.609	
設問 54	2 年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい ②：定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	→上位	56	1.339	0.026
			→下位	23	1.652	
設問 57	2 年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい ②：大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	→上位	56	1.375	0.050
			→下位	23	1.652	
設問 58	2 年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい ②：あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい	→上位	56	1.536	0.022
			→下位	23	1.826	
設問 59	2 年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい ②：大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	→上位	56	1.625	0.011
			→下位	23	1.913	
設問 64	2 年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	56	1.357	0.042
			→下位	23	1.696	
設問 69	2 年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業中で出された宿題や課題はきちんとやる) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	56	1.304	0.049
			→下位	23	1.565	
設問 76	2 年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (資格・免許の取得や公務員試験等をめざして勉強する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	56	1.804	0.004
			→下位	23	2.391	

更に、本学部として問題視する必要があるのが、質問 30 及び 31 に対する回答結果である。いずれの項目についても、上位を維持した学生の方が満足度で低い結果が出ている。特に授業・教育システムに対する満足度の低さは、彼らが良好な成績を修めているだけに、我々に根本的な問題を突きつけるものとして捉えなければならない。

② 1 年次に中位であった学生の変化

続いて、1 年次に中位であった学生について、上位へと上昇した学生と下位へと転落した学生とを分かつ要因を分析するために、両者間で有意差を生じた質問項目を纏めてみると、表 3-6 と表 3-7 のようになる。

表 3-6 中位→下位と中位→上位学生で有意差（5%水準）を生じた諸項目（1年次）

設問番号	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	上位/ 下位	N	平均値	有意確率
設問 2	あなたの所属している学科 ①法律、②政策法	→上位	82	1.524	0.003
		→下位	90	1.300	
設問 25	受験の追い込み時期のとき、学校での授業以外に1週間平均で何時間くらい勉強をしていましたか ①30時間以上、②20～30時間、③10～20時間、④1～10時間、⑤1時間未満、⑥全くしていない	→上位	82	2.561	0.041
		→下位	90	3.067	
設問 34	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（大学の授業以外の自主的な勉強） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	82	1.805	0.022
		→下位	90	2.078	
設問 37	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	82	2.402	0.034
		→下位	90	2.678	
設問 43	あなたは1週間のうち、だいたい何日大学に通っていますか ①1日、②2日、③3日、④4日、⑤5日、⑥6日、⑦7日、⑧0日（処理時に0に変換）	→上位	82	5.000	0.010
		→下位	90	4.733	
設問 49	大学の授業以外に1週間平均で何時間くらい勉強をしていますか ①30時間以上、②20～30時間、③10～20時間、④1～10時間、⑤1時間未満、⑥全くしていない	→上位	82	4.146	0.018
		→下位	90	4.522	
設問 53	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい ②：単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	→上位	81	1.568	0.024
		→下位	90	1.378	
設問 64	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	81	1.358	0.018
		→下位	89	1.584	
設問 71	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業の復習をする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	80	2.513	0.040
		→下位	89	2.775	

このように、中位→上位と中位→下位の学生間では数多くの項目で有意差を生じており、全体的な分析を行うのは容易ではないが、特徴的な項目を取り上げるならば、下位に転落した学生は、2年次の回答において、大学の授業、社会活動そして読書に対する意欲がいずれも低いことが挙げられよう（表3-7 設問32、37、39参照）。ただその一方で、こうした学生が課外活動やサークル活動等に精力的に取り組んでいるかといえ、そういうわけでもない。サークル活動等、アルバイトそして趣味等に対する意欲では5%水準でも有意差は認められないのである。

つまり、成績が中位→下位となった学生は、学業以外の事柄に打ち込み過ぎて成績を落としているというよりも、全般的な面で意欲を失ってしまっている可能性が高い。このような学生が再び意欲を取り戻すためには何が有効か、これもまた大きな課題である。

表 3-7 中位→下位と中位→上位学生で有意差 (5%水準) を生じた諸項目 (2 年次)

設問番号	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	上位／ 下位	N	平均値	有意確率
設問 32	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか (大学の授業) ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	93	1.441	0.037
		→下位	121	1.645	
設問 37	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか (社会活動 (ボランティア、NPO 活動などを含む)) ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	93	2.237	0.030
		→下位	121	2.479	
設問 39	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか (読書 (マンガ、雑誌を除く)) ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	93	1.892	0.041
		→下位	122	2.115	
設問 40	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか (同じ大学の他の学部に移りたい) ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	→上位	92	2.870	0.017
		→下位	121	2.479	
設問 41	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか (同じ大学の他の学科に移りたい) ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	→上位	93	3.290	0.028
		→下位	122	2.984	
設問 42	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか (他の大学に入り直したい) ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	→上位	93	2.935	0.033
		→下位	122	2.623	
設問 49	あなたは大学の授業以外に 1 週間平均で何時間くらい勉強をしていますか ① 30 時間以上、② 20～30 時間、③ 10～20 時間、④ 1～10 時間、⑤ 1 時間未満、⑥ 全くしていない	→上位	93	4.097	0.001
		→下位	122	4.541	
設問 50	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか (外国語科目) ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	→上位	93	4.763	0.035
		→下位	122	4.525	
設問 51	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか (共通教養科目) ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	→上位	93	4.645	<.001
		→下位	122	3.902	
設問 52	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか (専門科目) ① 2 割未満、② 2 割以上 4 割未満、③ 4 割以上 6 割未満、④ 6 割以上 8 割未満、⑤ 8 割以上	→上位	93	4.667	<.001
		→下位	122	3.951	
設問 53	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい ②：単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	→上位	93	1.538	0.009
		→下位	121	1.355	
設問 54	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい ②：定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	→上位	93	1.194	0.001
		→下位	121	1.397	
設問 64	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.398	0.017
		→下位	121	1.620	
設問 65	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業に遅刻しないようにする) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.527	0.013
		→下位	121	1.793	
設問 66	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.925	0.012
		→下位	121	2.207	
設問 67	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業中に私語をしない) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.548	0.014
		→下位	120	1.808	
設問 69	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業中で出された宿題や課題はきちんとやる) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.559	<.001
		→下位	121	1.901	
設問 71	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業の復習をする) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	2.290	0.528
		→下位	121	2.818	
設問 72	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業でわからなかったことは、自分で調べる) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	2.172	0.024
		→下位	121	2.421	
設問 74	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (授業で配布された資料などを整理する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	1.667	0.011
		→下位	121	1.934	
設問 76	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (資格・免許の取得や公務員試験等をめざして勉強する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	2.022	0.028
		→下位	120	2.325	
設問 79	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (自分の意思で継続的に勉強する) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	93	2.172	<.001
		→下位	120	2.575	
設問 80	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか (できるかぎり良い成績をとろうとする) ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	92	1.565	<.001
		→下位	116	2.034	

③ 1年次に下位であった学生の変化

最後に、1年次に下位であった学生のうち、2年次に成績を上位へと上昇させた学生の特徴を明らかにするために、上位へと上昇した学生と、下位のままであった学生との間で、回答に有意差を生じた諸項目を挙げると表3-8の通りである。

表3-8 下位→下位と下位→上位の学生間で有意差（5%水準）を生じた諸項目

設問番号	年次	(上段) 質問内容、(下段) 選択肢	上位／ 下位	N	平均値	有意確率
設問2	—	あなたの所属している学科 ①法律、②政策法	→上位	8	1.875	0.001
			→下位	53	1.283	
設問16	1年次	受験する際に、以下の各項目についてどの程度重視しましたか（都会にあること） ①あてはまる、②ややあてはまる、③余りあてはまらない、④あてはまらない	→上位	8	2.375	0.049
			→下位	53	2.887	
設問50	1年次	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか（外国語科目） ①2割未満、②2割以上4割未満、③4割以上6割未満、④6割以上8割未満、⑤8割以上	→上位	8	4.875	0.017
			→下位	53	4.340	
設問52	1年次	あなたは授業に平均してどの程度出席していますか（専門科目） ①2割未満、②2割以上4割未満、③4割以上6割未満、④6割以上8割未満、⑤8割以上	→上位	8	4.750	0.001
			→下位	53	3.849	
設問53	1年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい ②：単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	→上位	8	1.000	0.001
			→下位	52	1.288	
設問57	1年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい ②：大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	→上位	8	1.125	0.032
			→下位	52	1.481	
設問59	1年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい ②：大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	→上位	8	1.125	0.029
			→下位	53	1.491	
設問65	1年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業に遅刻しないようにする） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	8	1.250	0.013
			→下位	52	1.827	
設問33	2年次	これからの大学生活の中で、どのくらい力を入れたいと思いますか（サークルや部活動） ①とても力を入れたい、②少し力を入れたい、③余り力を入れたくない、④全く力を入れたくない	→上位	8	1.750	0.016
			→下位	81	2.543	
設問42	2年次	あなたは現在の大学生活の中で、次のように思いますか（他の大学に入り直したい） ①よくある、②時々ある、③あまりない、④全くない	→上位	8	3.500	0.022
			→下位	82	2.512	
設問45	2年次	あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか（文化系サークルや部活動） ①参加している、②以前は参加していたが辞めた、③参加しようと思っているものがある、④参加していない	→上位	8	3.875	0.048
			→下位	82	3.524	
設問56	2年次	大学教育について、あなたは次にあげる①、②のどちらの考え方に近いですか ①：教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい ②：学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい	→上位	8	1.000	<.001
			→下位	82	1.183	
設問69	2年次	大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか（授業中で出された宿題や課題はきちんとやる） ①とてもあてはまる、②まああてはまる、③あまりあてはまらない、④全くあてはまらない	→上位	8	1.375	0.046
			→下位	81	1.975	

この結果から、上位へと成績を上昇させた学生の特徴として、以下の二点を読み取ることが出来る。第一に、単に入試方式等が自分に合っているという理由で本学部を志望したのではなく、受験勉強にもそれなりの時間を費やした学生が多いということである。第二に、1年次の成績は下位だったかもしれないが、授業中に出された宿題等をきちんとこなすだけでなく、教員の指導に積極的に従う姿勢を明確に持っているということである。

もちろん、教員の指導に従うよう指示するだけで状況が改善されるとは考えられないが、特に下位の学生に対する教員の指導の有効性を示すものといえる。

4. 結びにかえて

最後に、本調査の意義と、今後の展望と課題について、以下の3点を考察してみたい。

4.1. 独自調査・分析の意義

学生生活実態調査を行う場合、教員の負担軽減や高度な分析手法の導入という点では、民間企業等の協力を得る方が、様々な点で有利であることは確かである。

だがその一方で、各学部等で行う独自調査・分析にも、一定の意義があると考えられる。第一に挙げられるのが、学業成績等のデータと組み合わせた分析を行うためのハードルが低いという点である。昨今の個人情報保護に対する要請の高まりを鑑みれば、こうしたデータの外部提供は容易ではないが、独自調査の場合には、個人情報保護に十分な配慮をすることができれば、こうした点をクリアし易いという利点を有している。

次に挙げられるのが、各大学や各学部の状況に応じた多様な分析が可能だという点である。今回の調査では、学業面で成績不振に陥る学生の特徴を明らかにすることを第一に掲げたため、修得単位数に応じて上位、中位そして下位と区分したが、調査・分析の主眼が別な点にあれば、用いる成績データや区分の仕方を変更することも必要となろう。そして、仮にそうした要請が生じたとしても、独自に調査や分析を行っていれば、入手データを用いた試行錯誤が可能である。これもまた独自調査・分析の利点である。

4.2. 今後の展望

本学では、大学全体の取り組みとして、マイ・キャンパス・プランを取り入れている。これは、半期ごとに、学生に対して目標を設定するよう指示し、第2セメスター以降は、その達成状況の自己評価も求めるものである。そしてその際、学生が独力で目標設定や自己評価を行うのではなく、教員が実際に面談して指導や助言をするようにしている。

この結果、学生と教員との定期的なコミュニケーションが促され、両者の間の垣根を低くすることには役立っているようである。だがその一方で、本学部では一人の教員が計100名近くの学生を担当するケースもあり、一人の学生に多くの時間を割くことは難しい状況である。そして、こうした状況において、学生の実態を診断するためのポイントや、学生に注意を促すべきポイントが事前に情報として提供されていれば、面談の際の有益な資料となる筈であり、この調査は、そうした方向で活用しうる可能性を十分に秘めている。

また学生の生活実態まで踏み込んだ指導については、本学部でもまだ共通理解が形成されてはおらず、否定的な立場に立つ教員も存在している。このため、学生全体に対して指導を行うとすれば、各教員に委ねるのではなく、組織的に行わざるをえないであろう。まだ、実際に実施するには至っていないが、学生生活実態調査の回答の後、学生を集めた上で、全体的な傾向を伝えるといったことが考えられよう。もちろん、一人一人の学生に応じた指導にはならないが、学生の自省を促す効果は期待できよう。

更に、4学年全ての学生に直接伝えるとなれば、時間帯を設定したうえで教室を確保する必要がある。そこで、より現実的な活用策としては、調査結果を学生に返却すると同時に、自己省察を促すような資料を添付する方法も考えられよう。

今回の調査では、統計処理という点では高度な手法を用いることはできなかったが、より洗練された手法を用いて、学生がより自己省察し易い形での情報提供を図っていく必要もあるであろう。また、仮に洗練されていなくても、一人一人の学生に回答内容を返却すると共に、注意喚起が必要な項目を強調し、的確なアドバイスを添える方法も考えられる。

4.3. 今後の課題

今回の学生生活実態調査を通じ、学業成績を伸ばす学生、あるいは落としてしまう学生の基本的な傾向を把握することはできたが、この点についても様々な課題が指摘されよう。

第一に指摘しうるのが、学生の学業成績の処理方法である。今回は成績面で困難を抱える学生の特徴を明らかにすることを念頭に、修得単位数、それも基幹科目という専門科目を資料として用いたが、これ以外にも様々なデータの

活用が考えられよう。今回とは異なる観点に立った上で、他のデータを用いた分析も行っていきたい。

次に指摘しうるのが、この調査は、あくまでも学生を表面的に捉えたにすぎないということである。例えば、今回の分析結果から、2年生進級後に上位から下位へと成績を落とす学生には、授業に必要なものをきちんと持参しない傾向があることが明らかとなった。だが果たして、そうした学生に必要なものを持参するように指導するだけで、成績の下落を阻止できるかどうかは不明である。恐らく、授業に必要なものをきちんと持参しないのは、学業に対する取り組み姿勢の現れにすぎないのであり、仮にこの点が改善されたとしても、問題の本質的な改善につながるものではないであろう。

ところが、学生全体を対象としたマークシート方式の調査では、本質的な問題の所在を明らかにする点で限界がある。自由記述式、あるいはインタビュー方式、どのような方式が適切であるかについては今後の検討課題となるが、いずれにせよ、特に学業に対する姿勢等で問題を抱える学生が、何故そのような状況に陥っているかについて、より踏み込んだ調査分析を行う必要がある。

最後に、現在の我々の取り組みは、アンケート調査の実施等において、本学部の他の教員の協力を支えられていることは確かである。ただその一方で、組織的な改善活動への展開という点では、まだまだ不十分であり、この点の弱さが、クラス単位で回収が欠落したりする状況をもたらしているとも考えられる。

こうした調査は、単に学生の現状を把握するだけではなく、それを実際に組織的な改善に結びつけてこそ意味があるのであり、そうした取り組みは少数の教員の取り組みで実現されるものではない。今回の成果をどのように組織的な改善活動へと結びつけるか、我々にとっての大きな課題である。

註

- 1) 本稿は執筆者個人の責任において執筆されたものであることを予めお断りしておく。
- 2) 詳細については、次の文献を参照のこと。上崎・神田・林（2010）.「リアルタイムアンケートによる授業改善の試み」『日本教育工学会研究報告集』10巻5号、17～22頁。
- 3) 本学部の教員は、自分の担当科目以外については、学生の成績データに直接アクセスできないようになっている。
- 4) 基礎ゼミは必修科目であるため、受講生には再履修の学生も含まれている。このため、1年生に関する調査ではあるが、その全てが新入生であるわけではない。ただ、人数としては少数であるため、新入生の傾向把握という点では問題ないと考えている。
- 5) 本学部のいわゆるゼミであり、3年生配当として専門演習Ⅰが、4年生配当として専門演習Ⅱが置かれおり、原則的に同じ教員の指導を受ける。
- 6) 2012年度の学生生活実態調査も既に実施済みであるが、本稿の執筆時点でまだ回収処理は行えておらず、回収率についても不明のままである。
- 7) 調査票見本については、以下のサイトを参照のこと。
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/pdf/data_12.pdf>
- 8) もちろん、就職活動等を鑑みれば、特に後者の学生に対する対策を講じる必要性は高い。

参考文献

- 榎本環（2010）.「駒女大生の学生生活と社会意識——首都圏6大学比較調査から」『駒沢女子大学 研究紀要』17号、49～65頁。
- 小方直幸（2009）.「アウトカムアセスメントの可能性①学生調査からみたアウトカムの構造」『現代の高等教育』第507号、64～69頁。
- 中京大学法学部学生意識調査委員会（2003）.「授業に関する学生の意識—調査結果の概要—」『中京法学』37巻3・4号、351～440頁。
- 中京大学法学部学生意識調査委員会（2003）.「資料 授業に関する学生の意識—2002年調査の結果概要—」中京大学

法学会『中京法学』38巻2号、213～232頁.

中京大学法学部学生意識調査委員会 (2006). 「授業に関する〔中京大学法学部〕学生の意識—2005年調査の結果概要—」『中京法学』41巻1・2号、41～218頁.

中京大学法学部学生意識調査委員会 (2008). 「授業に関する〔中京大学法学部〕学生の意識—2006年調査の結果概要—」『中京法学』42巻3・4号、201～328頁.

山田剛史 (2011). 「学生調査の開発とマルチレベルFDの連動による教育の質保証」『大学教育学会誌』33巻2号、38～42頁.

山田礼子 (2009). 「学生の情緒的側面の充実と教育成果—CSSとJCSS結果分析から—」『大学論集』40集、181～198頁.

山田礼子 (2009). 「ホームページに世界の大学戦略を見る②IRと学生調査 学生調査の結果や情報の集積とその使い方」『カレッジマネジメント』157号、56～59頁.

山田礼子 (2010). 「大規模継続学生調査の可能性と課題」『大学論集』42集、247～263頁.